

不惑の塔 ～第三部 最終回 I shall return～

昭和30年卒 高原 誠



私はこの不惑の塔の最後の章を前にして、私の古き、良き友人が自分の大手術の前に私に書き送ってくれた言葉を思い出す。それは戦時中マッカーサー司令官が一時守っていた部署を引き上げる時に「I shall return」の言葉を残して去り、その言葉が示すように無事にその部署へ帰還したのであった。私の友人も無事に生還した。私はその人生の感動をこの言葉は実に言い当てていると実感した。私は筆を置き、歩いて来た道を振り返り、私が真に求めているものがあったのを知った。それは人生の確かさが如何に脆弱なものであるかという事実であった。其れゆえに私は年を重ねようとも、私は「I shall return」と心の中で呟くであろうと確信している。

Ich stehe nun kurz vor Vollendung meines Memoirs; ich werde bald dessen Schlusskapitel schreiben. Da denke ich sehr an ein Wort, das eine langjaehrige, sehr gute Freundin von uns an uns gerichtet hatte kurz bevor sie zum Krankenhaus ging, wo sie einen grossen medizinischen Eingriff erwartete: ?I shall return! “(Ich werde doch zurueckkehren). Es bezog sich auf eine Episode der 40er Jahre: Als sich der General McArthur der Alliierten einmal von seinem Hauptquartier auf den Philippinen waehrend des Zweiten Krieges zurueckziehen musste, sagte er es. Und er gewann es spaeter tatsaechlich zueruck, er kam triumphierend dorthin wieder.

Und unsere Freundin konnte auch nach Hause zurueckkommen? zurueck zur Gesundheit und zu ihrer Familie.

Ich meine, dieses Wort gibt wieder das

tiefe und eindrueckliche Gefuehl des Betroffenseins, das man im Leben hi und dort erlebt. Es war fuer mich ein Moment der wahrhaften Empathien.

Ich lege mein Schreibzeug nun bald nieder, werfe meinen Blick zurueck auf den Lebensweg. Ich weiss heute ganz genau Eines, eine Wahrheit. Ich habe ja immer nach der Wahrheit menschlichen Lebens gesucht. Nun meine Entdeckung: Was man im Leben als das Gesicherte glaubt, ist doch eigentlich sehr prekaer, viel zu zart und ungesichert wie Hauch. Dies scheint ein Faktum zu sein.

Ich werde noch weiter meine Lebensschritte tun, auch nach der Beendigung des Memoir-Schreiben. Im Alter werde ich wohl mir leise aber ganz sicher fluestern; ?I shall return.“

第九章 クンチ馬鹿余談

市内の病院の町名は古川町で、7年毎に諏訪神社の奉納踊りをする町であった。この町の皆さんにはクンチ（10月7、8、9日の奉納踊りの祭り名）の出し物の時は昔の町名に拘って「銀屋町」として、長崎の秋祭りに参加した。踊り町として再び出る事になり、「それならと」最初から新しい企画に取り組み「鮓太鼓」と名うつて鮓を作り、それを40名で担ぐ出し物が完成了。それに囃しを付けるのが一苦労であった。それには勇壮な太鼓の音を振り付け、大太鼓、小太鼓を購入し、音の振り付けは専門家を雇い、練習に励んだ。練習場は稻佐山の中腹でする様にした。騒音防止の為の苦肉の策であった。鮓太鼓をコッコデショを真似たものであったが、それが次第に独自の形に仕上がっていった。



約6カ月の練習で銀屋町独特のものに仕上がった。これには当時の町内会長の並々ならぬ努力と町内の若者の努力の結晶であった。衣装も新しいデザインの物を作り、地下足袋は佐賀県に特注で用意した。私は此の時から奉賛会長に就任して町内会長の補佐をする様になった。クンチの出し物として評判を呼び、長崎クンチの名物になった。クンチが終わって、大阪の御堂筋パレードに招待された。担ぎ手60人と共に大阪へ飛んだ。飛行機が大阪空港へ着地した時は全員で拍手を上げた。この時に私は若者の得権を感じた。宿は大阪の御堂筋が用意してあった。私は食事に大阪の名物でも食べに行こうと思っていた。食堂を覗くと、町内の女性軍が「先生！ご馳走ですよ」の声につられて着席した。食事は美味しく頂ければ全て山海の珍味になる事を知らされた。大阪在住はこの宿の食事を戴く事になってしまった。この事は私にとって良き教訓であった。頂く心の大切さを大いに味わった。長崎クンチは7年毎に回ってくる

ので、私は3回、奉賛会長を務めさせて頂いた。10月の7、8、9の日は朝から夕方の10時過ぎまで鰐太鼓について周り、町内の人、それに若者と共に苦楽を共にしたのは、人生の良き思い出になった。私が中学生の頃はオクンチが試験の期間中で、私は耳栓をして押入れの中で勉強していたが、クンチの囂しの音（シャギリの音）がどうしても聞こえ、いつの間にか家を飛び出した自分がいた。3才の頃から祖父母の隠居所に行つたが、クンチには必ず町に出てクンチを楽しんだのが、クンチ馬鹿になった病気の原因であったと思う。このクンチが持つ雰囲気は独特的のものがあり、それが肌に染み付くものであると思っている。現在、私はその町を離れて生



活をしているが、この季節になると意味もなく市内へ行って仕舞う傾向は未だに取れない。病院と病院があった町の人達は随分と変わったが、鰐太鼓の伝統だけは健在である。郷土愛というか、その愛着には大いに未練がある。それは長崎という町の持つ誇りみたいなものを感じるのである。日本の各地にはそれぞれの伝統の祭りが存在している。これは日本ばかりでなく、異国にも存在するのを旅先で経験した。祭りはその土地の文化なのであろうか。

NHK の番組にこの様な昔の報道番組「新日本紀行」が存在し、時々それが放映される度に、長崎クンチへのノスタルジアを感じるのは私ばかりでは無さそうである。今回、古川町は再び銀屋町という名称に変更される事になり、今回(平成 19 年)から公認された「銀屋町」として「鰐太鼓」の「鰐」が長崎の大空に舞う事は私の誇りであり、わたしの青春の「シンボル」である。銀屋町としての名称はこの町の人達の長年の念願であり、町内の拘りが実ったのである。

第十章 閑話；その一、名前の由来

水津野泉青は大正 9 年 4 月に銀屋町で「医院」を開業した。昭和 18 年に浦上第一病院の創立に参加し、昭和 22 年に聖○○病院・長崎診療所に改称、昭和 25 年 1 月に聖○○病院を辞し、新しい医院として再出発し昭和 25 年 4 月に社団法人の病院を開設した。この社団法人は私有の財産を全て国に寄贈し、私有財産を放棄し、改めて法人組織の医療機関として、それに従業員の一員として働く事を意味する。若し、これが解散となれば全ては国の所有となるという厳

しい改正を自らに課した処置であった。これには父の固い信念が込められていた。勿論、父の死後の遺産相続はなく、父の全ての子孫はその相続権を放棄するという定款が含まれていた。美田は子孫に残さない「世の中から頂いたものは、全て世の中に還元する」という信念であった。

昭和 25 年 4 月の「挨拶文」

「…私共数名の医師が当市浦上の聖○○病院の戦災後その復興に参加協力中は公私共に御厚誼を辱うして深く乾佩いたします。その中の一人（水津野医師）は同院の復興後昨年 12 月末都合により急に同院を辞して浦上の住居を引き払い、大正 9 年 10 月以来開業していました銀屋町の古巣へ引き上げ従来の通り又医院として再出発することになりました。ご承知のことと存じます。他数名の医師も考えるところあって聖○○病院を辞し新しい医院に於いて数名の同信同志の医師が一体となり診療に従事することになりました。私共がかねて夢を描いて実現し得なかつた願いを今度こそは果たしたいものと念じております。私共の願いが分不相応なことかも知れませんが、それが正しき願いであるならばいつか具現されるであろう信じております。同信同志の医師数名をはじめ薬剤師、レントゲン技術者等一同が期せずして相寄り相扶けて一道を歩み出すことになりましたのも遠き宿縁なりと共に慶び共に讃嘆しつつ茲に社団法人を組織して、いささかなりとも公益に役立たせて頂きたい覚悟で御座います。前途は多難で御座いましょう。生活革命への門出といった心持で、荊の道を踏む決意で御座います。ともす



原爆後の浦上第一病院内

れば足もと覚束無い私共で御座います。皆様の御鞭撻と御指導とによらでは所期の目的達成も難しいことで御座いましょう。何卒宜しくお願ひ致します。新しき発足に当たりましてここに私共の所信を申し述べてご挨拶申し上げる次第で御座います」これによつて父は聖〇〇病院を去つた。その時、東京からプルダン神父が來崎されて、「先生のご自宅の料金です」と数百万円を持参された。父は「それを頂くと浦上に賭けた私の夢が消えます」と言って断固として、受け取らなかつた。プルダン神父は「先生の本当のお気持ちが始めて解りました」と言われ、静かに帰つて行かれた姿を私は忘れる事が出来ない。

昭和31年に長年の念願であった東望療養所が開設された。この時の喜びを水津野泉青は著書「水の味」に記している。「結婚当初からの私共の念願でありました療養所計画のためには一切を犠牲にしてその実現のために精進して呉れました。昨年3月31日東望療養所の落成式の当日には、式後歩行不能の家内を椅子にかけさせて子供一同でかついで所内を一巡させましたが眼は涙に曇つてよく見ることも出来ずそのままになつてしましました。

一筋に命ささげしの君の

念願なりぬ桜さく目に

三十五年の夢の療養所けふなりぬ

吾妻は病みて足はたたなく

これはその日の私共夫婦の感想でありました。」

父は母の死亡の後、母を病理解剖にふし、火葬場から帰宅して、その母の骨を病院の玄関先の楠木の根元と玄関先の楠木の根元に埋葬し、寺院の門徒総代を辞任して、挨拶文を認め公表した。その挨拶状は次の二通である。



挨拶文（一）

拝呈

永年 御厚情を恭うしておりました荊妻とも子が本月22日午前6時45分遂に大往生の素懐を遂げました。57才で御座いました。22才で私の許に嫁して参り両親に仕えること30年、その間私に代わつて孝養の限りを尽くして呉れました。9年前父をみたて、2年後母をみたててこれで地上での自分の重責をどうやら果たさせて頂いたと一息つくまもなく自分はリウマチスに犯されこの3年間は病床につききりで不自由と苦痛の連続でした。本年3月末より心臓病を併発して次第に悪化の一路を辿り、遂に苦惱の娑婆との縁がつき御浄土に参らせて頂きました。思えば私の許に嫁してまいりましてからは全く多忙な苦しい生涯がありました。結婚当初から私共の念願でありました療養所計画のためには一切を犠牲にしてその実現のために精進して呉れました。昨年3月31日東望療養所の落成式の当日には、式後歩行不能の家内を椅子にかけさせて子供一同でかついで所内を一巡させましたが眼は涙に曇つてよく見ることも出来ずついそのままになつてしましました。

一筋に命ささげしの君の

念願なりぬ桜さく目に

三十五年の夢の療養所けふなりぬ

吾妻は病みて足はたたなく

これはその日の私共夫婦の感想でありました。

家内は多忙を極めた日暮しの中にも真剣に聞法につとめて呉れました。黙々と白道を辿らして頂く身となりいよいよ娑婆の縁がつきて、静かに安養の浄土に参らせて頂くことが出来ましたことはこの地上に於て何ものにもかえ難い幸いで御座います。



私共夫婦のかねての願いによりまして、人として最後の行事にも一切の礼儀を廃し仏式にもよらずただ近親のものだけで最後の別れを惜しみました。解剖に附したあと火葬に附した始末で御座います。浄土真宗寺院出身の私が世間の慣例にそむいて事後になって皆様へ御知らせいたしましたのも、いささか考えることがあってのことでの御座います。何卒おゆるし頂き度う御座います。生前故人によせて頂きました御厚情に対して茲に厚く御礼を申し述べて御挨拶に代えさせて頂きます。

早々不一

昭和 32 年 5 月 24 日 水津野 泉青
挨拶文 (二)

拝呈

今度荊妻とも子の死去につきましてはいろいろと御配慮を頂き厚く御礼申し上げます。通知の中で申し述べました様に死去直後直ちに僧侶の御引導を願わず、居合せた近親の者だけで最後の別れを惜しみ 4 時間後には解剖に附しました。死因をたしかめるためには出来るだけ時間の経過しないことを病理解剖の必要条件とするからであります。解剖の結果は永年のリウマチのために約 3 ヶ年使用したコチゾンの作用の

悪い結果を引き起こしたのでありました。疼痛を和らげるために却って死期を早めしたことになりましたが何とも致し難いことで誠に悲しいことであります。去る 6 月 4 日、一番都合のよい日でありましたので、これまたお寺方の御光来も願わざ近親の者と有縁の方々の手によって遺骨を二株の楠木の根元に埋めさせて頂き、子供等の手によってその上に土をおおい最後の別れの涙をそぞぎました。楠木と申しますのは故人がその建立の礎ともなりました東望療養所の玄関脇の路傍に一本と、故人の療養のためにと日当たりのよい土地に子供等の発願で小屋を建てましたものの、落成と同時に病革って遂に生前には一日も休息出来なかった思い出の家の前にも一本を私の墓標にと植え込んでいたものであります。これから朝な夕な楠木の根元に水をそぞぎながら故人の思い出に日々の反省ともなりましょうし、明年の今頃には緑したたる清新な芽生の中に亡き妻亡き母の復活を讃える日も来ましょう。こんなことで、人間最後の儀礼をすまさせて頂きましたことから、世間かなりきつい御批判も頂きましたが、実は私の死後にやつてもらいたかったことを亡妻の場合に早速実行



いたした様な次第で御座います。現在では寺院のあり方が死人のあと始末になってしましました。仏教は決して死人のためのサービスではなく生きた人間への道の開拓でありましょう。死人の前では読経は徒に魔呪的なものとなり生きる人のための道とはなりません。時代と共に人の生活が変わって参りました。活ける人の歩いて行く足どりにふさわしく道の革命も然るべきだと信じます。現代の寺院のあり方では仏教衰退の一途を辿る外はないと憂えるものであります。戒名は如何にしたかとの詰問もうけましたがこれこそ無用の長物だと信じます。生涯呼びならされた名前こそなつかしいものではありませんか。強いて別名がほしければ私が生前に故人の病氣リウマチに因んで竜馬チ子という芳名をつけてやりましたので、これ以上のよき名はないと存じます。人間の最初であり、最後の儀礼である婚儀と葬儀のあり方についてはかねて考えていたことでございますが、一生のうち必ず問題となってくるこの二つの儀礼について真剣に考え直す時が来た様であります。失礼なことで御座いますがこれを機会にこの問題について忌憚なき御批判と御考えをお聞かせ頂きとう御座います。日がたつにつれ「老木のさえを妻が持つて行き」ました感が深う御座いますが、これから又老書生になってうんと勉強させて頂き亡妻の命をうけついで二人前の仕事をしなければと覚悟いたしております。何卒この後も御指導頂けます様に御願いいたす次第で御座います。先ずは御礼旁々御挨拶まで

昭和32年6月12日（水津野泉青記）

第十一章 新たな構想の下に

水害で痛んだ病院の老朽化はその衰退の一途を辿っていた。然も、医療対象の変遷は激しく、消化器疾患から循環器疾患へと医療の主題を医療界は模索しだしている様に感じられた。私は自身、循環器疾患の研修へ行く心準備を始めたが「自分の研修も大事だが、専門医を雇い入れ、全体の管理をすべきではないか」との理事会での結論であった。私はこれに反対したが、時代の流れと自らを慰めた。これが将来の後悔の最大の原因になろうとは、その時点では考えも及ばなかった。大学から一名の循環器疾患の専門医を紹介して貰い、病院の今後の医療方針を検討する様になった。その専門医の意見を基礎に新病院の構想を考えた。私はその構想が余

りにも小規模な循環器疾患の設備である事に困惑した。市内には大学があり、特殊な疾患は大学へ送るのが常識と言えばそれまでだが、循環器疾患を診るという大きな目標の病院の体制にしてはお粗末なものではないかという一抹の不安が私の脳裏を過ぎった。理事会では準総合病院としての民間病院との構想があり、その一部として循環器疾患を診るという視点からはそれは妥当であり、呼吸器疾患、消化器疾患と共に並存させる循環器疾患という認識であったからである。私はその中で、一歩進めた設備を循環器疾患に焦点を絞りたかった。これが強調出来なかつた事は自分自身が循環器疾患を研鑽しなかつた弱点でもあった。結局、呼吸器、消化器、循環器の三本立ての病院の構想で事が進み、設計図が出来、完成した。この設計図を前にして、私はこの科目別の診療体制での収支内容を知りたかった。予定収入と必ず支払う人件費の増加とのバランスを知りたかった。然し、それを分析出来る理事者、相談役はいなかつた。病院コンサルタントは数字を出したが、それは実績ではなく、あくまでも予想の範囲に留まつていた。医療の将来に対する展望、それに対応する手順の確たる信念を見つける事が出来なかつた。唯、将来、リハビリは大きな位置を占め、各疾患の治療後には必要であろうという位の予想でリハビリ室を広く取るという手直しで着工に踏み切つた。かつて岡治道先生が「時代のニーズに対応出来なければ、将来に禍根を残す」と言われた恩師の言葉がこの時、私の脳裏に走つた。然し、呼吸器、消化器、循環器の三本立ての病院は完成した。診療を進めている内に、見かけは實に順調に見えた、然し、循環器疾患を診る診療の底の浅さを或る先生から指摘された。「この程度の検査を他の診療所に依頼するのは、少なくとも循環器診療の看板に恥を塗る様なものだ」と言われた。自分自身が循環器疾患を研修せずして、それを指導する資格がないのが、矢張り、命取りであったのは、自業自得の結果であった。然し、私の心配を他所に病院の経営は順調であった。私は消化器の医師に内視鏡の技術を指導した。この技術は特殊なものでその医師が育つのに数年は要した。病院の体制上、実務を離れ、理事長に就任し、院長に副院長を昇格させ、副院長を二名にして、体制を強化しようとした。病院の体制は整ってきたが、此処で働く医師、看護婦、その他従業員の気持ちには

「我が病院」という意識の希薄を感じてきた。自分の病院という「誇り」「自覚」は次第に希薄になって行くのは時代のなせる業であろうと私は秘かに想わざるを得なかつた。矢張り、平成元年に亡くなつた総婦長の存在価値の大きさを想うのであつた。

私は理事長として、この病院運営責任を全面的に背負う力に限界を感じ始めた。年齢的に70才代では力の限界があり、遂に、理事長職を次期の理事長に移譲した。また、時代は社団法人は真会という名称を変更しようとしたがこれは不可能であった。この社団法人を解散となれば、この組織は總て國のものになるという創立者の厳然たる思想に裏打ちされた組織であつたからである。これこそ「不惑の塔」の存在価値なのであろう。私はこの「不惑の塔」の存続を可能に出来なかつたが、この名称が存在する限り、何時かは、誰かが、創立者が願つた「眞の医療の原点」に立ち戻り、眞の医療機関を作ってくれるであろうと念じている。

現在、医療機関は利益追求に終始し、患者のため、患者の眞の憩いの場所としての存在理由を喪失している傾向が見られる。医療機関は何のために存在するのか、これは医療人に関わる人々が考慮すべき命題である。自らを反省する転換期に現在は來ている様である。医療の荒廃は医療に携わる人の心の中に起きてきている難病ではないだろうか。眞の医療は「奉仕の精神」に裏打ちされたものではならない。先人は言つた「問題は常にある。問題は常に内にある」と。

終論

三回で書いた「不惑の塔」は又、時期を見て付記したい事が多い。それは私がこの世の常に流された人生の実態であるからであろう。聖徳太子の「世間虚偽、唯仮是眞」の言葉が示す様に眞実を求めて、それを獲得出来なかつた我が身を知る事というより、知らされた事の重大さを改めて思はされた。時代の変化は次第に急速になってきたが、人間本来の姿は変わらべくも

ない。それぞれの宿業を果たして行くのである。私は時代の流れの中から脱出したと思ってきたが、私自身未だ流れの中で漂つてゐる自分の姿を知らされた今日この頃である。

(完)

Ich habe meine Memoiren in drei Teilen vor Kurzem zu Ende geschrieben unter dem Titel "Das Turm eines Dezidierten" (Fuwaku no Toh). Bereits jetzt stelle ich aber fest; es gibt doch noch einige Details, die ich spaeter zu gegebener Zeit dem Text hinzufuegen moechte. Wie es bei uns normal Sterblichen so haefig der Fall ist, weiss auch ich nur die Aspekte des Lebens, das oft von Usancen dieser Welt verwaschen bzw. verdeckt wird. Der Prinz Shotoku der Aska Aera (ca. 7Jh.) sagte bekanntlich: In diese Welt ist alles nur vom kurzem Dauer und alles ist im Vorlaufigen verdeckt. Auf der Suche nach Wahrheit habe ich versagt, und ich stelle fest, ich bin nur so einer. Nein, es ist ja viel mehr, dass ich es um so merh schaetze, was ich nun in der Hand habe und mit meinen Augen sehe.

Alles veraendert sich rasant-besonders in der heutigen Zeit. Doch das, was das Menschliche ausmacht, kann nicht so schnell anders werden.

Jeder muss seinen Weg zu Enbe gehen, der fuer ihn bestimmt worden ist. Es wird ja "go" genannt, sein schicksalhafter Weg.

Ich hatte gedacht, ich haette all das, was die Zeit und der Zeitstroemungen uns antun, entgehen koennen. Doch jetzt stelle ich fest, auch ich schwimme und schwebe in deisen Stroemungen herum.

Ich bin zu dieser wahrhaften Feststellung nun gekommen.

(Ende)